

## 『三四郎』論：「命の根」が揺らぐとき

著者名(日)	橋川 俊樹
雑誌名	共立国際研究：共立女子大学国際学部紀要
巻	28
ページ	21-37
発行年	2011-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00002265/">http://id.nii.ac.jp/1087/00002265/</a>



# 『三四郎』論

——「命の根」が揺らぐとき——

橋 川 俊 樹

## はじめに

この論文の前置きとして、夏目房之助著『漱石の孫』<sup>1</sup>の一節を引用したい。

「百年前、社会的に絶対少数の『孤独な知識人』の課題だったものは、戦後の僕の時代にはすでに『大衆』といってもいいほど広汎な存在になった中間的知識人、あるいは亜知識人の課題になりうるのである。」

これは、マンガ評論家・研究者である氏の〈マンガの文法〉構築への試みと、祖父夏目漱石が理論的〈文学論〉を構築しようとした行為の表面的な類似について、その時代背景にある根本的な相違を指摘した部分である。

言い換えると、「孤独な知識人」の大衆化がこの百年の間に進行してきた、ということである。

『三四郎』（1908〈明治41〉年9月1日～12月29日、東京朝日・大阪朝日新聞連載）という小説は、田舎から上京してきた大学生を描いている。当時の帝国大学生は明らかに少数エリートであったが、1890年に帝大生になった夏目金之助の場合には文字通り「絶対少数」（英文科の本科生としては、ただ一人）のエリート知識人だった。近代知識人の先駆けとして、主に英文学と格闘し、1900年から二年余りのロンドン留学以後は〈日本対西洋〉という大問題を自身に引き受けて『文学論』<sup>2</sup>を構築しようとした漱石を起点とすると、それから20年足らずの後輩にあたる三四郎世代の時点ですら、知識人の〈大衆化〉は急速に進行している。そして、漱石とその世代が挑んでいた課題やテーマがもっていた意味や価値も、時間の推移とともに変質していることがこの小説から読み取ることができる。

『三四郎』以前、『吾輩は猫である』（1905～1906年）や『草枕』（1906年）等において、太平楽な、あるいはディレクタント的な知識人を漱石は好んで描いているが、かれらは苦渋にみちた〈文学論〉構築を志していた孤独な知識人・漱石の、陽気なネガであった。

1907（明治40）年前後の大学生の姿を、激烈に変化する日露戦争後の東京を背景に描き出すことに徹底した『三四郎』は、田舎出の主人公の変化を丁寧に描いていくが、それは必ずしも彼の成長物語ではない点が重要である。小川三四郎は最後まで、成長途上の知識人予備軍に過ぎない。

翌 1909 年の『それから』の主人公長井代助の場合、頭脳も生活態度もまさしく〈知識人〉と呼ぶにふさわしい人物として造型されている。この開き直ったように〈遊民〉としてディレッタントを気取る人物が、平凡な小川三四郎の直接の後裔であるとは言いがたい。しかしそんな本格派〈知識人〉代助も、自身が誇る大切な頭脳やプライドが、最後には真っ赤に焼き尽くされて終わる運命をもつ。

三四郎以降、夏目房之助が「中間的知識人、あるいは亜知識人」と呼ぶ層は、高等教育の普及とともに大正・昭和を通じて右肩上がりに増加していった。平成に入ってから、四年制大学卒の女性中間知識人層も急増する。もちろん 21 世紀の現代における〈知識人〉は百年前のそれとは明らかに様相が違うが、漱石が抱いた『文学論』構築への大志や、代助のような〈知識人〉ゆえの自滅のような壮大なドラマはなくとも、現代には現代なりに〈知識人〉たちの野心や煩悶が渦巻いていることも確かである。

このような現代の状況からみて、成長途上の知識人予備軍である小川三四郎というキャラクターは、完成した〈近代知識人〉長井代助よりも意義が深いように思われる。

小論では特に、三四郎がいかにか〈知識人〉に近づいていくかというテーマではなく、彼がなろうとする〈知識人〉という存在と、彼が属する〈中間層〉が抱えていた限界や欠点に焦点をあて、そこから何が見えるのかを検討したい。

### (1) 〈お金〉に無頓着な三四郎

三四郎は小説の冒頭で、「汽車の女」と「髭の男」によって、「真実に熊本を出た様な心持」になる。つまり、精神的に故郷の田舎と絶縁した気になり、新たな世界としての大都会・東京に胸をふくらませ、「髭の男」(広田先生)のような男は東京には「到る処に居るもの」とまで信じてしまう。

実は「汽車の女」のように「見当が付かない」行動をする恐ろしい〈女〉も、「日本より頭の中の方が広い」と言える風変わりな〈知識人〉も、広い東京ですらなかなか出会う機会がないのだが、作者の漱石は主人公の青年に落雷のようなこの二つの刺激を与えて、彼が熊本以前にもっていた〈自分〉を吹き飛ばしてしまう。

しかしここで注目したいのは、冒頭部の、「汽車の女」と「爺さん」との会話である。

「小供の玩具は矢張<sup>やっぱり</sup>広島より京都の方が安くつて善いものがある」(傍線筆者)と、女は言う。海軍の職工をしていた夫は戦争後、「あつちの方が金が儲かると云つて」「大連へ」出稼ぎに行っている、それが「この半年」ばかり前から「手紙も金も丸で来なくなって仕舞つた」と嘆いている。これに対して爺さんは、「一体戦争は何の為にするものだから解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿気たものはない。世の好い時分には出稼ぎなど、云ふものはなかつた」、と言って同情する。

爺さんの発言を漱石の日露戦争批判ととらえる論もあるが、ここでは素朴な庶民感情の表現とみておく。

下線で示したように、女と爺さんの関心はほとんど〈お金〉にからんでいる。金儲けのために満州に出稼ぎに行った夫は、『草枕』の那美の前夫を想起させるが、こちらは〈都落ち〉ではなく本式の出稼ぎである。職工の収入では妻子を養うのに苦しいのと、金儲けへの野心のためだろう。

仕送りが途絶えて実家に帰るしかない境遇の女と、戦争で息子を失って物価の高騰を呪っている爺さんとの会話に対して、三四郎は何の反応もしていない。〈お金〉がない、乏しい、という感覚が三四郎にはわかっていない。つまり〈生活〉がわかっていないということになるが、特に「汽車の女」のもつ生活面に何の関心も同情も持っていない。彼女には夫があり、子供が居て、お土産のおもちゃの値段にまで気を配る〈生活〉があるのだが、三四郎には見えていない。三四郎が見ているのは、「口に締りがある」、「目<sup>はつぽ</sup>が判明してゐる」、若い女の美貌である。

「あなたは余つ程度胸のない方ですね」と言われて、「ブラット、フォームの上へ弾き出された様な心持」を三四郎が味わうことになるのは、そういう女の背景に無頓着だったせいである。女が宿を一緒に探してくれないかと三四郎に頼んだ時点で、同室になることは女には想定済みで、同衾すらも想定内であっただろう。親切的な学生の背中を流すことくらいは何でもない。ひとり旅の女にとって重要だったのは、適当な宿に断わられずに一泊できることであり、同宿するリスクの少ない相手を見つけることが最大の懸案だった。貞操の危険よりも、泥棒の危険を重視していたことだろう。〈お金〉の方が〈からだ〉よりも大事、という感覚が女にはあったと言える。

金に無頓着な三四郎は、金に神経をそそぐ庶民の感覚がわからない。それは、まだ金を稼いだことのない学生だからであるが、しょっちゅう金に困っている都会慣れした与次郎にくらべても、田舎の地主の坊ちゃんである境遇が無頓着さを強めている。三四郎の故郷として使われた「福岡県京都郡<sup>みやこ</sup>」出身の小宮豊隆にしても、同じく九州の田舎出の野上豊一郎などをみても、漱石の弟子の帝大生たちの中でも、安定した故郷を控えている地主の息子たちにはこの傾向が強い。金の問題ならどうにでもなる、という感覚があるから、金がない、あるいは、金を稼ぐ苦しさ<sup>3</sup>に無頓着でいられるのだ<sup>3</sup>。

女の背景が理解できない三四郎は、貞操すらも成り行きまかせにして腹を据えている女の行動がまったく読めない。同じ蚊帳の中で寝るときにはさすがの女も身構えていたはずだが、シーツを防衛線にした男の行動を見て、内心は失笑していたことだろう。危険な事態に度胸を据えているのは女で、未知のものへ進む度胸がないのは男の方なのである。

これが大学生という知識人予備軍一般の持つ欠点のひとつである。もちろんそれは、金銭に鷹揚で、他人に親切な、女性を大事にしようとする美点の裏返しでもある。

では、すでに〈知識人〉といえる野々宮や広田の場合はどうだろうか。

第4章で「三つの世界」を三四郎が認識したとき、野々宮と広田が代表する「第二の世界」の人は、「<sup>なり</sup>服装は必ず穢ない。<sup>くら</sup>生計は屹度貧乏である。さうして晏如としてゐる」と説明されている。大学の講師と考えられる<sup>4</sup>野々宮の給料は第3章に「月にたつた五十五円」とある。この当時の大学出の銀行員や高等官の初任給などから考えて、当時の一円の価値は現在の五千円程度と考えられる<sup>5</sup>ので、今なら27万円程度だろう。たしかに高くはない。第一高等学校教授か講師で年齢が上の広田はもっと多いだろう<sup>6</sup>が、貯金が全くなく二〇円（つまり約10万円）の現金にも困ることが、8章のバイオリン騒動でわかる。引越しの場面の蔵書量から想像すると、広田の場合は高価な洋書の購入にお金が消えていくらしい。広田も〈お金〉を軽視する典型的な〈知識人〉である。

ちなみに与次郎は広田を大学教授にしようと画策するが、1908（明治41）年当時、外国人から日本人教授への切り替えをはば終えていた東京帝国大学の中では、文科大学の外国語・外国文学の学科は例外で、3人の教授は外国人のみである<sup>7</sup>。そして9月14日の「東京朝日新聞」によれば、英文科唯一の教授ジョン・ローレンスの月給は六二五円だという。講師でも、英語・英文学担当のスウィフトが月給二八〇円、ロイドが二五〇円と書かれている。前年に漱石、上田敏、藤代禎輔などの日本人講師が去り、『三四郎』が書かれた当時の東京帝大の外国語・外国文学科は外人ばかりであった。月給七〇円の講師だった漱石が英文科教授の地位を打診されたときでも、提示された俸給は一五〇円だったという。与次郎たちの反発は〈お雇い外人〉の高過ぎる俸給に対してでもあったであろう。それにしても、当時の極端な円安<sup>8</sup>を踏まえても、日本人大学講師や高等学校教師との格差は甚だしい。

しかし、「現世を知らないから不幸で、火宅を逃れるから幸である」とされる、第二の世界の住人は、「火宅を逃れ」られる程度の収入を得ているし、それが余裕ある傍観者でいられる条件にもなっている。「汽車の女」や爺さんより上の、庶民というより〈中間層〉という呼称がふさわしい階層に彼らは属している<sup>9</sup>。三四郎は彼らを「貧乏」と表現しているが、程度の高い「貧乏」である。

同じく大学出のインテリであっても『野分』（1907年）の白井道也や『明暗』（1916年）の藤井は、収入が少なく安定しない文筆家なので「貧乏」と呼ぶにふさわしいが、彼らはそれでも己れの主義や傍観的態度を貫いている。つまり、〈生活難〉に対して瘦せ我慢をしている。特に藤井の場合は、小学生の息子の靴も新しく買えないような暮らしであるのに、世間と妥協してもっと稼げる口を探そう、とはしない。そこには、〈金〉に屈っしまいとするインテリの意地が色濃くみられる。それに較べると広田は、定職のある独身生活が余裕ある傍観的態度を支えている。一高の英語教師の地位と収入や、養うべき妻子や親族のいない独り身であることが広田という人物を形成している。

一方の野々宮は、自分に必要な書斎や実験室さえ確保できていればいいので、それに女学校に通う妹にバイオリンか何かを買ってあげる余裕があればいい、らしく見える。野々

宮は、ある程度まで寺田寅彦をモデルに造型されているが、その寅彦は1908年に理学博士となっている。『三四郎』連載中の「東京朝日」(10月2日付)に大きく報道されていて、数えて31歳、妻子と小石川に住んでいることや、博士論文が音響学の研究で、「潮汐曲線の分解をなす器械」の発明や「液面に浮べる棒の振動」「尺八の研究」などの論文で学位を授与されたと報じ、「大学院規程の五年間を以て博士号を獲得したる者は恐らく君を以て嚆矢とすべし」と称えている。当時の寅彦は大学院生の身分のまま講師を務めていた。

しかしすでに二度目の妻を迎え、子供をもつ寅彦と違い、野々宮が美禰子との結婚を具体化しようとしなかった理由は、研究と妹の相手だけで十分な、彼の生活や気分が、その必要に迫られていなかったからであろう。精神的にも、時間的にも、経済的にも、野々宮にはすぐに美しい花嫁を迎えて己れの人生を飾る必然性が感じられなかったのだと考えられる。〈お金〉に頓着しない、〈生活〉と向き合わない〈知識人〉の感覚が現実の結婚へ踏み出させにくくしていたとも言える。

こうしてみると、冒頭に登場する女と爺さんの存在は、三四郎を刺激するだけではなく、野々宮や広田のような〈中間層〉の知識人を相対化する機能をも持っていたと言えよう。

## (2) 〈生活難〉に冷淡な三四郎

「汽車の女」は〈生活〉のために、仕方なく実家に帰っていった。爺さんは高い物価に苦しみながら生きていくことだろう。そしてもうひとり、〈生活難〉を訴える人物が10章に出てくる。失職したばかりの地方の中学教師である。

「先生と知らぬ男はしきりに地方の中学の話始めた。生活難の事、紛擾の事、一つ所に長く留つてゐられぬ事、…〈中略〉…今度辞職した以上は、容易に口が見付きさうもない事、已むを得ず、それ迄妻を国元へ預けた事——中々尽きさうもない。」

これに対する三四郎の反応は冷たい。

「三四郎は柿の核を吐き出しながら、この男の顔を見てゐて、情けなくなつた。今の自分と、此男と比較して見ると、丸で人種が違ふ様な気がする。此男の言葉のうちには、もう一遍学生生活がして見たい。学生生活程気楽なものはないと云ふ文句が何度も繰返された。三四郎は此文句を聞くたびに、自分の寿命も僅か二、三年の間なのか知らんと、<sup>はんやり</sup>盆槍考え始めた。」

三四郎にはこの男の「生活難」への同情も、「汽車の女」と同じように国元に帰っていった細君への憐憫も見られない。ただ「今の自分」と比較し、自分の卒業後への<sup>はんやり</sup>盆槍した不安だけがある。

広田の方は、この男に次のように言う。

「中学教師杯の生活状態を聞いて見ると、みな気の毒なもの<sup>ばか</sup>の許の様だが、真に気の毒と

思ふのは当人丈<sup>だけ</sup>である。なぜといふと、現代人は事実を好むが、事実に伴ふ情操は切棄<sup>きりすて</sup>る習慣である。切棄なければならない程世間が切迫してゐるのだから仕方がない。其証拠には新聞を見ると分る。新聞の社会記事は十の九迄悲劇である。けれども我々は此悲劇を悲劇として味はう余裕がない。ただ事実の報道として読む丈である。自分の取る新聞杯は、死人十何人と題して、一日に変死した人間の年齢、戸籍、死因を六号活字で一行づつに書くことがある。簡潔明瞭の極である。…〈中略〉…すべてが、この調子と思はなくつちや不可ない。辞職もそのとおり。当人には悲劇に近い出来事かも知れないが、他人には夫程<sup>それほど</sup>痛切な感じを与へないと覚悟しなければなるまい。」

三四郎と違って広田は、「事実に伴ふ情操」（つまり、同情）を「切棄なければならない程世間が切迫してゐる」ことを認識している。

日露戦争後の物価の高騰は、1907年1月の株価暴落に始まる不景気と相俟って、庶民の生活を直撃した。戦前の水準からすると30%以上も上昇した物価は、増加する失業者や、〈中間層〉とまでいかぬ庶民の生活を脅かしていた。そして当時の新聞は、〈生活難〉による自殺・心中・犯罪などを連日のように書き立てている。

平成版岩波『漱石全集』第19巻『日記・断片 上』の「明治41年（初夏以降）断片四八A」には、漱石が「東京朝日」や「国民新聞」の記事から取ったメモが数多く見られるが、中には〈生活難〉から起こった「悲劇」に当たる社会面のメモも多い。

たとえば、p.390にある「田子浦入水親子三人脊髄病」とあるのは、5月10日の東京朝日には「●三婦人海に投ず ▽田子の浦の「行く春」 ▽仔細ありげな歌」と見出しがある記事で、翌11日に「田子の浦死婦人探査」、12日「田子の浦三死婦人 ▲三死婦人死体撮影」、13日「田子の浦三死婦人 ▽惨憺たる屍体」と追加記事が続き、15日には判明した身元などを報じている。

その見出しは、「●昔気質の標本 △田子の浦に死せし母娘三人 ▼貧苦、病苦、昔気質 ▼夫は切腹、二女は狂気」というものである。水死したのは、加藤きく（63）、長女なみ（41）、四女しげ（27）で、このうち見つかっていなかった四女の遺体は、28日に「繁子の死体漂着す」と報じられている。

また、このメモに続く「本所小女二人同時入水」は、6月7日の東京朝日に「●娘同志の情死 ▽一人は失恋一人は家庭の苦辛 ▽相抱いて池中に投ず」とある、本所に住む精工舎の女工、お光（16）とお糸（17）の心中事件である。特にお光については、「工場より帰宅すれば下女同様に使役せられ辛さ身に沁めるより寧ろ死せし方が優しなりと少女心に突きつめしが動機となり」、と書かれている。

p.391にある「六月十三日故法学士渋谷慥衛（二十八年没）未亡人三人ノ遺子ト共ニ横須賀ニテ入水ス。長男次男共ニ多病ナル故ナリ。死スルヲ得ズ。」は、同日の東京朝日の見出しには「故渋谷法学士 未亡人の厭世 ▽母子四人海に投ず ▽三度死を図る」とある。漱石は触れていないが、長女は電話交換手をしていて自活できるため、母と兄弟は置

いていこうとしたのだが、それを「看破」した長女は「私一人世に生<sup>なが</sup>らへて何かせん」と言ったという。

このように同情をひくべき、憐れむべき事件が次々に起こってくる状況では、広田の言うとおり、その「悲劇を悲劇として味はう余裕がない」に違いない。しかし、それらの記事を今読んでみると、単純な自殺や心中では新聞の片隅にも載らない現代にくらべれば、よほど情緒豊かな時代であったこともわかる。

おそらく6月初めから書かれた<sup>10</sup>「断片四八A」のこれらのメモは、その時期と前後のメモの性質から考えて、『三四郎』執筆の役に立てようとする意図があったと推定できる<sup>11</sup>が、直接の材料になっているものはない。けれども、3章の〈轢死〉は明らかに新聞の社会面から発想を得ている。これについては次節で述べる。

そして、広田が「死人十何人と題して、一日に変死した人間の年齢、戸籍、死因を六号活字で一行づつに書くことがある」というのは、それが東京朝日であるならば、7月20日の「●自殺者十一人」と題した記事のことだろう。「自殺の日時」、「自殺の方法」、「自殺の原因」、「住所氏名」の順に表にして一覧できるようになっていて、確かに便利である。しかし、毎日これだけの人間が自殺しているという事実を突きつけられているようで空恐ろしい思いにもさせられる。

広田は日露戦後の社会が、〈生活難〉に苦しむ人たちが溢れていることを認識している。しかしそれは、行ったことのないパリの街を写真から想像することにも似て、実感の伴わない、頭の中だけの認識に過ぎない。けれども社会の底辺で起こっていることを想像する能力を有するので、〈轢死〉を間近に見たとしても、三四郎のようには驚かずに受け止めることができるだろう。広田はたぶん40才前後だろう<sup>12</sup>が、年令や経験からというよりも、その傍観的態度の徹底によって現実の社会や世間に対峙することができている。失職した友人を慰めるわけではないが、相手の境遇を思いやってグチを聞いてやる寛大さも持ち合わせているのである。

まだ社会に出ていない、長く有望な未来があると信じている青年にとって、大学を卒業しながら中学教師の職にすらしくじめる男は、「惜けない」だけに違いない<sup>13</sup>。しかし、人生に成功の夢しかみない三四郎のような学生や青年も、結果的にはかなりの割合で、失敗したり、脱落したりするのが現実である。『それから』の平岡は、その好例である。彼は失敗を挽回しようとアセって世の中に運動するが、どこか精神に狂いが生じていると、長井代助から見られている。そういう「生存競争場裡」から降りた気である代助は、中学生の甥の将来について11章で次のように言う。

「それから先何んな径路を取つて、生長するか分らないが、到底人間として、生存する為には、人間から嫌われると云ふ運命に到着するに違ない。其時、彼は穏やかに人の目に着かない服<sup>なう</sup>装をして、乞食の如く、何物をか求めつつ、人の市をうろついて歩くだらう。」

この将来像は若者にとってあまりにも酷薄だが、「人の市」＝世の中・社会に出る気の



ない代助からすると当然の真理である。人間の社会はすべて、『三四郎』11章の与次郎のことばを借りれば)「みんな利害問題が動機になつてゐる」と代助は信じている。「利害」最優先の〈社会〉に出れば、「利害」に都合の悪い〈個人〉は殺されざるを得ない。甥の誠太郎のもつ、愛すべき子供らしさなどは真っ先に殺されてしまうだろう、と代助は考える。

広田には代助ほど〈個人〉を殺す〈社会〉に対する嫌悪は感じられないが、〈社会〉の犠牲となって、狂い回り、自滅し、自殺する人間たちの存在を見据えてはいる。

『三四郎』の主要人物は、ほとんどが〈中間層〉に属していると言える<sup>14</sup>。〈生活〉に支障のない、〈お金〉に困らない〈中間層〉の人々には、〈下層〉あるいは〈貧困層〉への想像力が欠けているのが普通である。したがって大学・本郷を舞台に、学生・〈知識人〉・若い女性の交流を主に描くこの作品には、本来、〈貧困層〉あるいは〈庶民層〉が登場する余地はあまりないはずであるが、冒頭の「汽車の女」と爺さんのように、漱石は意識的にこれらの層の人間を登場させている。

余裕のある〈中間層〉と余裕のない〈貧困層〉の対置が『三四郎』にあることは、1965年頃からすでに平岡敏夫・三好行雄によって指摘されている<sup>15</sup>。三好氏は、「漱石はふたつの現実を、明確な計算によって書きわけている」と述べているが、重要なのはその「計算」の内実だと思われる。たとえば、平岡氏が重要性を指摘した3章の〈轢死〉の場面は、〈ふたつの現実の対置〉を示す好例としてだけ処理してしまっているものだろうか。

漱石はどこまで「計算」して、〈市に生きるもの〉たちを点綴したのだろうか。そして、それらの庶民・〈貧困層〉と対置されているのは、余裕のある〈中間層〉であろうか、傍観的な〈知識人〉だろうか、若い青年・女性であろうか。おそらくは、そのすべてが答えと言えるのだろう。しかしそれでは、漱石の意図をぼんやりとしか見通せない答えでしかない。

この点からも、〈轢死〉の場面の意義を再検討したい。

### (3) 「命の根」を揺るがされた三四郎

引っ越したばかりの野々宮の家は、大久保にあった<sup>16</sup>。三四郎は大久保の停車場近くの線路脇の土手上にあるその家で留守居をしているとき、〈轢死〉を目撃する。

「宵の口ではあるが、場所が場所丈にしんとしてゐる。庭の先で虫の音がする。独りで座つてゐると、淋しい秋の初である。其時遠い所で誰か、

『あゝ、あゝ、もう少しの間だ』

と云ふ声がした。…〈略〉…三四郎の耳には明かに此一句が、凡てに捨てられた人の、凡てから返事を予期しない、<sup>ひとりごと</sup>真実の独白と聞えた。」

三四郎が轢死者の最後のつぶやきを聞いている点が重要である。すぐに来た汽車が「前

の列車より倍も高い音を立てて過ぎ去った」とき、「ただ轟と云ふ一瞬間」に奪われた命が「慥に生きてゐた」と言える証人に三四郎はなる。

「三四郎は無言で灯の下を見た。下には死骸が半分ある。汽車は右の肩から乳の下を腰の上迄美事に引き千切つて、斜掛けの胴を置き去りにして行つたのである。顔は無傷である。若い女だ。」

自殺したのは「若い女」であった。この点も重要である。

1908 (明治 41) 年の東京朝日新聞を調べていくと、〈轢死〉、鉄道自殺の記事は頻繁に出現する。たとえば、5 月 22 日の「●可憐しき美人の轢死 ▽内気なる評判娘 ▽戯言に羞ぢて死す」は、深川の酒屋の娘お絹 (18) が芝浦で轢死したのを報じたものである。

死体の状況が詳しく報じられている轢死の記事もある。

7 月 3 日の記事は、日暮里で轢死した電話交換手・渡辺重子 (19) について、「屍体は頭部と腹部を切断され首は三十間も離れて横はり実に残を極め」と表現している。下線部の表現との類似性と『三四郎』の具体的な構想時期が 6 月からである<sup>17</sup>ことをみても、この記事が〈轢死〉の死体描写の元である可能性は高い。轢死した重子は 1 日から東京電話交換局の交換手になったばかりであったが、関係者の証言として「平素勝気な女だけに今の零落を無念に思ひ世を面白からず感じて自殺を決心したるならん」とある。

漱石は三四郎に「若い女」の轢死を見せることで、三四郎が出会う美禰子やよし子のような〈中間層〉の女性とは異なる世界に生きる女性を垣間見せている。この女性は、既婚で子供がある「汽車の女」ともおそらく違っている。「すべてに捨てられた」、生きる苦しさに耐えかねた若い女性のイメージは、先に掲げた記事にある二人の轢死した少女とも異なっている。どちらかと言えば、漱石がメモしていた、「工場より帰宅すれば下女同様に使役せられ辛さ身に沁めるより寧ろ死せし方が優しなりと少女心に突きつめし」という精工舎の女工・お光 (16) にイメージは近いと思われる。

平岡敏夫は、『日露戦後文学の研究』の第一部「三つの轢死」の第一章で江見水蔭『蛇窪の踏切』(1907 年 6 月、「文芸倶楽部」)を取り上げている<sup>18</sup>。

「『蛇窪の踏切』は、篠原露代なる美しい女子芸術学校生徒が肺結核にかかり、寄留先を追われ、たよりに訪ねた婚家先の姉からも冷くあしらわれ、洗足小池から品川の方に向けてとぼとぼ歩いて行き、ついに蛇窪の踏切で轢死をとげる物語である。」

露代の苦難の原因は病苦にあり、身のより所がないことにあるが、「美しい女子芸術学校生徒」という点で『三四郎』の轢死した女とは異なっている。少なくとも彼女は「美しい」と表現されてはいない。

「三四郎の眼の前には、ありありと先刻の女の顔が見える。其顔と『あ、あ、……』と云つた力のない声と、其二つの奥に潜んで居るべき筈の無残な運命とを、継合はして考えて見ると、人生と云ふ丈夫さうな命の根が、知らぬ間に、ゆるんで、何時でも暗闇へ浮き出して行きさうに思はれる。三四郎は欲も得も入らない程怖かつた。」

女の死に顔と死ぬ前の声の奥に「無残な運命」を想定する三四郎に、どこまで具体的な女の身上への想像が働いたかはわからない。ただ彼は、一瞬前までは生きていた人間が一瞬後には死んでいる、そうさせた「無残な運命」の存在を感じた。おそらくその生贄には年令も性別もなく、誰が選ばれるかも分からない。つまり、いつ三四郎にも降りかかるかわからない性質のものであることに、心底おびえたのである。

平岡氏は「三つの轢死」のなかで、国木田独歩の『窮死』（1907年6月、「文芸倶楽部」）を取り上げて検討しているが、まさに「窮死」としか言いようのない、土方の文公の憐れな死に様のほうが、三四郎を心底おびえさせた女の死に様と通底しているだろう。

1908年の5月から6月、東京朝日には自殺に関する評論が断続連載されていた。その中の『自殺と殺人』という記事の6月16日の回に、長谷川二葉亭が飛び入り参加して、意見を述べている<sup>19</sup>。

「其人をして愈々自殺するに至らしむるのは経済問題即ち物価の騰貴、生活の困難が最も密接な関係を有するだらうと思ふ。特に日露戦争以後に於ける我国の社会には此現象が非常に多いので、財政上の失敗の為に自殺する者や生活難に堪へ兼て自殺する者が著しく増加した。…〈中略〉…日下の困難なる生活状態は社会上大問題で生活の苦痛が激しくなればなる程 自殺や殺人の如き悪現象もだんだん多くなる。」

二葉亭四迷はこのように、急増する自殺は、日露戦後の生活苦・生活難が主な原因と明言している。

また、同年7月号の「早稲田文学」に掲載された、呉秀三『自殺に就て』には、増加傾向の自殺者数の統計を掲げた<sup>20</sup>上で、次のような意見が述べられている。

（多くの原因の中で）「最も重大な関係のあるのは生存競争が劇烈になり生計が段々困難になつて来ることである。女子に於ては」、「犯罪でも自殺でも精神病其他の罹病数でも皆一様に男子に増加するよりも著大な比例を以て増加して来た。」

そして自殺の原因については48%が「精神病」によるものと言い、その他の原因として、「生計の困難」・「薄命」・「病苦」・「痴情」・「不和」・「損失負債」・「罪の発覚又は処刑の恐怖」・「将来の苦慮」・「鬱愛」などを掲げている。

『三四郎』の轢死した「若い女」が、生活苦から自殺したかどうかはわからない。しかし、その原因が「精神病」や「病苦」、あるいは職場や家族との「不和」などであったにせよ、それが日露戦後の「生活難」や劇烈な「生存競争」と無縁だったとは思われない。「『あ、あ、もう少しの間だ』」という腹の底から出た言葉は、社会に見捨てられた、あるいは社会から落伍した者のみがつ窮極の呟きである。そこに〈貧困〉の影を見ることは容易であらう。

結局三四郎は、この女の声も顔も次の日には忘れてしまうけれども、彼が生きている都会はこの女のような「悲劇」を内包しつつ動いている。9章に出てくる火事の場面も同様である。

「三四郎は寝巻の上へ羽織を引掛けて、窓を明けた。風は大分落ちてゐる。向ふの二階家が風の鳴るなかに、真黒に見える。家が黒い程、家の<sup>うしろ</sup>後の空は赤かつた。

三四郎は寒いのを我慢して、しばらく此赤いものを見詰めてゐた。其時三四郎の頭には運命がありありと赤く映つた。三四郎は又暖かい布団のなかに潜り込んだ。さうして、赤い運命のなかで狂ひ回る多くの人の身の上を忘れた。」

「赤い運命」は、現実の社会に生きる人々を脅かす災厄である。死んだ方がましだというネガティブな心理をもたらし根源である。先の「無残な運命」もこの「赤い運命」も、いずれも人間に、破滅か〈死〉をもたらしものである。『それから』のラストで、代助の頭の中をジリジリと焼くのは、まさしくこの「赤い運命」である。これを平易に言い換えると、代助であれ三四郎であれ、社会に出て〈お金〉を稼ぎ生活していこうとすれば、この「運命」が口を開けて待っていて、いつでも破滅か〈死〉の危険に曝される、ということになる。

社会に出て働くことを拒否していた代助の場合、いざ現実の生活を始めようとするれば、他人や世間と軋轢を起こす〈個人〉としての自分や〈知識人〉としての頭脳は焼き尽くされる必要があった。彼は「穏やかに人の目に着かない<sup>なう</sup>服装」をして、『門』（1910年）の宗助のような低収入の小役人生活にも甘んじなければならない運命にある。三千代の〈愛〉を現実を得ることができなかった場合、代助を待っているのは生活の苦痛だけである。それでも、三千代への〈愛〉のおかげで精神的に生き返ることができた代助は、自殺することはないだろう。たとえ三千代が病死したとしても、〈愛〉の代償としてあるいは義務として生き続ける責任が彼の場合にはある。

轢死者が「若い女」である意味は、当然、美禰子やよし子との対照にあるだろう。この二人には経済的な余裕の違いがあるけれども、働かずに済む階層の女性であることに変わりはない。

1908年7月28日の東京朝日に、「●<sup>しんじゅう</sup>兩根山中二婦人の情死」という見出しの記事がある。自殺者は横浜郵便局の雇員、河野みわ（17）と上草みつ（18）で、みつの残した遺書には、「実に暗黒の世の中で<sup>ただ</sup>唯一時の夢に過ぎません実に何の楽しみもありませんあゝ夢の世だと思ふて実に厭世になります」とあった。

さらに、上司の郵便局長の次の談話からは、働く「若い女」の実情が浮かび上がってくる。

「男子ならば働いて月給でも取ると先づ酒でも飲んで心を慰めるが女子は其働いて得た月給も家に帰れば母に預けるとか又は家計の方に廻すとかして少しも慰安の途がない」

当時の働く女性の多くは、自分のための〈お金〉を持っていなかった。

また11月6日には、「瀧の川水死美人 ▽新橋電話交換局の交換手」という記事がある。自殺したのは土肥千代子（21）、府立第三高等女学校を三年で退学し、前年2月から交換手をしていた。彼女の月給は28銭で、めいばい働いても月に7～8円程度にしかならな

い。

これらは任意の例に過ぎないが、美禰子やよし子のいる〈中間層〉との境遇の格差は歴然としている。しかし漱石が『三四郎』を書くとき、これら〈貧困〉女性の状況を十分に認識していたかどうかは疑問である。三好氏が述べた通り、漱石はあくまで〈ふたつの世界〉を対置させるために〈轢死〉の場面を持ち出してきたと考えて差し支えないが、それによって三四郎を「人生と云ふ丈夫さうな命の根が、知らぬ間に、ゆるんで、何時でも暗闇へ浮き出して行きさうに」思わせるまでに怖がらせた点が問題である。

「命の根」がゆるんで「暗闇へ浮き出して」いく、というイメージは尋常ではない。『それから』の末尾とも違った不気味さを湛えている。生きていく、あるいは生きているという事実は、それほど脆く頼りないものだということを、三四郎は頭ではなく心で感じとって慄えている。人間の生きる希望や意志はいとも簡単に挫け、〈死〉の慰安への誘惑に囚われる。そのきっかけの多くは、実に散文的な〈お金〉の欠乏という問題に過ぎない。

このように『三四郎』では、余裕ある〈中間層〉や〈知識人〉と対比する材料だった生活問題や経済問題は、つぎの『それから』において主人公を追詰める主体となるまでに重要性を増している。そこでも「自然の愛」との対比において、〈お金〉や〈生活〉が意味をもったのだが、その次の『門』では、〈貧しい生活〉そのものが主題となっている。しかし、『門』には〈愛〉の見返りとしての〈生活〉への屈従あるいは安住だけが描かれていて、〈生活〉の底に潜む「無残な運命」に対する意識はかえって失われているように見える。

これはおそらく主人公の野中宗助が〈生活〉そのものに盲従しているからで、三四郎が恐れた暗い運命が訪れたとしても、彼ならば破滅や死をあっさりと受け入れてしまうように見えるからだろう。宗助にとっては友人の安井に対する罪悪感の方がより大きな恐怖をもたらすものである。この後の『彼岸過迄』(1912年)、『行人』(1912～1913〈大正元年～2年〉)、『こころ』(1914年)になると、〈死〉以上の心理的苦痛、自殺しか道が残されていない〈知識人〉の運命などが描かれることになるので、須永や一郎、先生の苦悩の前では、三四郎を震えあがらせた「無残な運命」も色褪せたものに映る。

結局、若い三四郎にとっては〈死〉そのものが最悪の残酷な運命に過ぎないのであって、『こころ』の先生のように慰安としての〈死〉＝自殺すら封印しているような人物の苦痛には、思いも及ばない。けれども、だからこそ三四郎には、本格的な〈知識人〉ではない、庶民に近い感覚の人間性が見てとれる。彼はまだ、何の指針も方向性も人生に見出していない。自分がいま〈生きている〉という、しっかりしていそうな「命の根」が簡単に切れてしまうのだとするならば、彼が頼るべきものはどこにもない。この根源的な不安に対抗できるような、それでも大丈夫と信ずるに足るだけの何かを若い彼は何も持っていないのである。この点は現代青年も同じである。

「汽車の女」や爺さんのような庶民は、〈お金〉が満足にありさえすれば人生はどうにで

もなると信じているところがある。しかし、〈お金〉に困っていない三四郎や美禰子がそれだけで満足できるはずもない。〈貧困〉や〈生活苦〉にあえぐ人間と、経済的には困らない人間には苦悩の質に雲泥の差がある。けれども、余裕ある〈中間層〉や〈知識人〉の苦悩がどれほど「高尚」であろうとも、たとえば〈轢死〉した女の苦悩を思うとき、それらが相対化された限定性のなかで読まれるように、作者の漱石が仕向けているという事実が重要である。

筆者はかつて、1984年の論文『『明暗』—富裕と貧困の構図—』<sup>21</sup>において、漱石作品の登場人物を〈富裕〉と〈貧困〉の図式で分類し、その意味を検討したことがある。特に『明暗』においては、富裕層（岡本、吉川など）と貧困層（藤井、小林など）は鮮明に分けられている。けれども実は、『明暗』の中で〈生活苦〉をもっとも印象づけるのは登場人物ではない。百六十四節で小林が津田に読ませている手紙である。また、この手紙が印象づける〈生活苦〉は、貧困はもちろんだが、手紙の主が陥っている人間関係の〈闇〉にその根源がある。

『蛇窪の踏切』の露代も姉から冷たくあしらわれたことが自殺の強い動因になっていたように、金がないこと、貧しいことが、〈生活苦〉のすべてではない。そこから生まれる家族・親族・関係者等との不和・軋轢が生きる上で大きな害をなすことが問題なのである。とにかく目の前にある貧苦や病苦をどうにかしなければ生きていけない、という問題と、そういう自分をサポートしてくれる他人がいらないという事実は不幸なことにリンクする場合が多い。

漱石は『野分』の白井道也を貧苦に負けない高潔な人物として描いたが、道也の窮地を最後に救うのは教え子の高柳であったように、〈生活苦〉に真に対抗すべきものは、家族や友人などとの良好な人間関係である。これがなければ真に人生の地獄となることを、『明暗』の手紙はよく示している。三四郎の「命の根」を揺るがした「若い女」の〈轢死〉にも、〈貧苦〉と、おそらくは根深い〈孤独〉の影がある。

そのような黒い影を背景として、三四郎は「<sup>さん</sup>燦として」輝く〈青春期〉における「迷羊」状態のなかでさまよっている。キリスト教で使用される「迷羊」という言葉は、導き手を持たない、精神や心の迷子のことを指すだろう<sup>22</sup>。三四郎の場合、生きることそのものに不安や疑問を持つ〈知識人〉及びその予備軍に特有の煩悶を抱えながら、若さにふさわしい未来を模索する姿が「迷羊」なのだろう。

すでに述べたように、三四郎の苦悩は、社会や時代の暗い影によって相対化され、限定的な価値しか持たされていないけれども、そういう〈底の浅い苦悩〉こそが真に青年の苦悩というべきものだろう。長野一郎や『ころ』の先生の明確な苦悩と違って、21世紀の青年にも通じる軽さを持っている。〈轢死〉も火事もすぐに忘れ、子供の葬式も他人事にしか感じない〈若さ〉は、それ故に方向の見えない、終着点が分からない不安をいつも抱えている。

## おわりに

「はじめに」で前置きしたように、いかにも漱石らしい近代知識人の苦悩は、現代では大衆的な中間知識人たちの中に溶解し、変形した形で継承されているように思われる。

どんな時代であっても、生きること自体が苦悩と困難を伴うことは多くの人間にとっての真実でありつづけるだろう。いわゆる〈知識人〉の苦悩も、〈貧困〉に伴う生活難も、生きる上での困難であることに変わりはない。漱石は『三四郎』以降の作品で、〈知識人〉の苦悩を徹底的に追究していった。中でも自伝的小説『道草』（1915年）は漱石自身の〈知識人〉としての苦悩がリアルに描かれている。その一方で、漱石の家族・親族などをモデルとした〈非知識人〉たちの姿も克明に描かれている。そこにはすでに、『三四郎』にあった単純な対置的構図など意味をなさないまでに現実的な生きる苦悩のあり方が示されている。

言うまでもないことだが、夏目漱石は『吾輩は猫である』・『倫敦塔』（1905年）のデビュー以来、次々に作品内容を変化させ、深化させていった。これが進化であるかどうかは置くとして、その深まりとともに、始めは図式的に描かれていたものが次第に微妙なディテールを伴ったリアルな表現に変わっていったことは確かである。

小川三四郎のような単純素朴な青年はその後ほとんど書かれなくなる<sup>23</sup>。しかし現代から見ると、淡いとも薄いともいえる彼と美禰子との恋愛模様は、シンプルだからこそシンナリと読者の心に入りこみ消しがたい印象を残す。いまだ知識人予備軍に過ぎず、恋愛の幸福も人生の不幸も知らずに済んでしまったラストで、三四郎がつぶやく「ストレイシープ迷羊<sup>ストレイシープ</sup>」には、おそらく大きな意味も深い認識もないのだが、若さゆえに失ってしまったものへの哀惜が余韻とともに繰り返されているように感じられる。

(2010年11月10日稿)

## 〈注解〉

- 1 夏目房之助『漱石の孫』（2003 実業之日本社）。新潮文庫版（2006）より。
- 2 ここではロンドン留学時代に構想していた壮大な『文学論』のことを指す。1907年に刊行された講義録のことではない。
- 3 津田青楓『漱石と十弟子』（1949 世界文庫。芸艸社版〈1974〉より）に、「漱石山房にゆく。例の顔ぶれ四、五人、小宮、安部、東洋城、三重吉、草平君。いづれを見ても上品な文学士様、僕らのやうな無学な貧困者はゐない。どの顔を見ても親の脛で、大学を出た文学士ばかりだ」とある。
- 4 後述するように、モデルの寺田寅彦が講師であった。また、月給の額も講師相応である。
- 5 『賃段の風俗史』（1987 朝日文庫版）によると、第一銀行の初任給は1908年に三五円、1910年には四〇円。高等文官試験に合格した高等官の初任給が1907年に五〇円、1911年に五五円。現在の水準から考えて、一円が五千円程度の価値と考えると妥当な額。もちろん、低所得だった小

学校教師や巡査などを基準にすれば、一円の価値は一万円以上になるが、モノの値段から照合するとそれでは高過ぎる。たとえば、庶民的な紙巻たばこの銘柄「ゴールデンバット」は当時五銭、一円が五千円の価値なら二五〇円だが、一万円ならば五〇〇円になり、漱石が吸っていた「敷島」は一〇銭なので、その倍になってしまう。

- 6 モデルと言われる岩元禎は一高教授だったが、漱石は一高でも講師（月給八〇円）の身分だった。
- 7 英語・英文学のローレンス、仏語・仏文学のエック、独語・独文学のフローレンツ。
- 8 たとえば、二葉亭四迷が1908年6月に東京朝日新聞の特派員としてロシアに向かうとき、九八五円を一〇〇英ポンドの小切手にしているので、当時の一ポンドは約一〇円になる。（関川夏央『二葉亭四迷の明治四十一年』1996 文藝春秋刊。2003 文春文庫版）
- 9 ここでいう〈中間層〉は、農業の地主層や安定した商工業従事者などの〈旧中産階級〉と、会社員・銀行員、医師・弁護士・学者などの独立専門職など明治末から大正にかけて飛躍的に興隆した〈新中間層〉と呼ばれる階層を合わせた呼称である。（佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』〈2002 東京大学出版会〉p.81 などを参照）
- 10 「断片四八A」の新聞メモはp.390の7行目の「出菌亀。田子浦入水親子三人脊髄病。本所小女二人同時入水」から始まる。有名な出菌亀事件は3月22日に事件発生、4月6日に「●大久保美人殺 出菌亀の自白」という記事が「東京朝日」では報じられ、以降、5月・6月になってもこの事件の公判記事などが散見される。田子の浦の三人心中は5月10日から一週間以上記事が続いていたもので、本所の女工心中は6月7日の記事のメモである。以下、8行目の「中尉。副官を斬ル（恋の恨）」は、6月5日「●士官同僚を斬殺す 鳥取の椿事 △恋の怨み」という見出しの朝日の記事で、12日に「殺人中尉の護送」という続報が出ている。10行目の「大久保腎肉斬取事件」と11・12行目の「壺」に関連する記事の抜書きは6月9日の東京朝日から。13行目の「四十二三十九ノ夫婦情死」は全集の注解によれば6月8日の「万朝報」から、というように、冒頭の二つを除くと、6月5日、7日、8日、9日の記事がまとめてメモされている。次頁の1行目に「六月十日」とあるので、おそらく6月9日にまとめ書きされたものだろう。
- 11 「明治四十、四十一年頃」の「断片 47G」p.385～386に「○汽車轢死以前」「○柔術ノカタヲ教ハル」「○馬鹿離ノ稽古」など『三四郎』に使用された内容を含むメモがあり、書かれた時期は不明だが「断片 48A」の前後かと思われる。「断片 48A」では、「禿ヲ自慢スル者ハ老人ニ限ル」（p.391）、「田子の浦の海月を盗む様なものである」（p.394）、「もう梅雨は明けたんだらうか」（同前）、「自然ハ寶石ヲ作ルニ幾年ノ星霜ヲ費ヤシタルカ」（p.395）などが『三四郎』に使用されていて、これが構想メモの一つであったことを裏付けている。
- 12 『三四郎』の作品時間を1907年とすれば、広田を分身とする漱石は数えて四十一才、モデルの岩元禎は三十九才である。
- 13 当時の東京帝国大学文科大学（現在の文学部）の卒業生の半数以上は中学教師となっている。
- 14 注9参照。
- 15 平岡敏夫「三四郎」（1965・8「国文学」）、三好行雄「迷羊の群れ」（『作品論の試み』1967 至文堂）。
- 16 大久保が〈轢死〉の舞台に選ばれていることについては、平岡氏などの見解があるが、注10で示したように出菌亀事件の舞台が大久保であり、発生した3月末以降、物騒な凶行現場として1908年当時の新聞読者から意識されていた地名である。当初は大久保周辺にいる乞食が疑われていて、東京朝日は4月1～6日まで「戸山原の乞食」というコラムを連載し、6日の見出しは「戸山原の乞食（五）〈完〉 ▽落合村の魔林 ▽大久保はまだ不安心」であった。ド女ひとりでは心配なので三四郎が留守番を頼まれる、という設定にするのに好都合だったことは間違いない。
- 17 注10・11参照。「断片四八A」の最後は、六月「二十七日 夫婦結核、貧、妻子二人を連れて自殺セントテ諸所を漂泊ス」であるから、後の「断片四九A（『三四郎』メモ）」（p.398）は、6月末か7月前半に書かれた可能性が高い。



- 18 平岡敏夫『日露戦後文学の研究（上・下）』（1985 有精堂）。
- 19 この記事の前書きに「記者がこの記事を書いて居ると長谷川二葉亭氏が側へ来て次のやうなことを言った。一説として其大略を記載する」とある。二葉亭は6月12日にロシアに向けて離京しているが、この記事の掲載が遅れたのだろう。
- 20 呉文聰が調査した明治23年から37年までの統計を使用している。これによると、明治23～25年の自殺者数が22,218人であったのが、35～37年には28,796人に増加している。年に7,200人程度であったのが、9,500人以上に増えている。
- 21 橋川俊樹『『明暗』—富裕と貧困の構図—』（1984・7「稿本近代文学」）。
- 22 当時の「東京朝日新聞」に出現している「迷羊」の用例が1908年7月10日の広告にある。「木下尚江著 小説『乞食』」の広告文で、「宗教道徳は軍政の奴婢と成り果て世は沙漠の如く人は迷羊に似たり」とある。木下尚江周辺の関係者にとってはわりあい一般的な言葉として認識されていたらしい。
- 23 『彼岸過迄』の田川敬太郎が例外である。ネーミングも小川三四郎と似ている。

Soseki's *Sanshiro : Inochi-no Ne-ga Yuragu Toki* (When the Roots of Life Shake)

Toshiki Hashikawa

This paper is about *Sanshiro* (1908) written by Soseki Natsume. The lead character, Sanshiro Ogawa, a freshman at Tokyo Imperial University comes up to Tokyo from the country, a future “intellectual.” This half-baked intellectual young man has various experiences in the company of elder “intellects” and young women in the university and the big city of Tokyo.

Sanshiro has a fault in his character which comes from his youth and his good circumstances as a student. He has no sympathy or interest in distressed people and the poor. Sanshiro's eyes look only toward his future and can't see “tragedies” in the real world reported in the city news pages of the newspapers.

This paper examines his fault through the contrast with Hirota and Nonomiya, who are his elder “intellects,” and digs up a part of the truth which Soseki tried to express in comparison with the characters in other Soseki's novels, like “*Sorekara*” (1909).